

学校教育において「自尊感情」をはぐくむことの意義について

—— ジェームズの思想から ——

小池 孝 範

はじめに——問題の所在

近年、「自尊感情 (Self-esteem)」をはぐくむ教育についての関心が高まり、研究の進展がみられるとともに、学校教育においても具体的な取り組みがなされている。学校教育における国全体の取り組みとしては、平成20 (2008) 年度の『文部科学白書』第2部第2章第1節2「豊かな心をはぐくむ」(2)「道徳教育の充実」の中で、道徳教育の充実が必要となる前提の一つとして、我が国の児童生徒における「心の活力の低下」をあげ、その要因の一つとして「自尊感情の乏しさ」を指摘している。この点は、平成20年度以降、最新の平成23 (2011) 年度版に至るまで、一貫して指摘されている。

さらに、「生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書」として、平成22 (2010) 年3月に出された『生徒指導提要』では、学校教育の中で「命の教育」に取り組むことの必要性を示した後で、取り組む際の留意点の筆頭に「児童生徒が自分自身を価値ある存在と認め、自分を大切に思う自尊感情をはぐくむ」ことがあげられている (文部科学省, 2010 : 180f.)。また、本書では発達障害をもった児童生徒が、一時的障害の障害特性に起因する二次的障害を防ぐために、発達障害のある児童生徒に対して、「特性によるつまづきや困難さにより、自信を失ったり自己評価が低くなったりしないように、自尊感情を高めていく対応」の必要性が示されている (文部科学省, 2010 : 160ff.)。

また、教育委員会レベルでも、自尊感情をはぐくむ、あるいは高めるための取り組みがなされており、例えば、東京都教育委員会では、平

成20年に策定された「東京都教育ビジョン (第2次)」において「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を重点施策の一つとしてあげ、「子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育」の研究をおこなっている (東京都教育委員会, 2009)。

研究の分野でも、自尊感情に関する研究は増加している。管見によれば、日本では1979年にはじめて自尊感情をタイトルに含む論文が発表され、心理学や看護、福祉の特に臨床的な分野を中心に90年代後半以降急増加し、現在は、年に100本以上が発表されている (図1参照)。

さて、自尊感情についての心理学の立場からの研究の嚆矢は、ジェームズ (James, W., 1842-1910) が、1890年に出版した "*The Principles of Psychology*" (邦題『心理学原論』) において示したものであるとされる。しかし、1950年代に至るまで、自尊感情に関する実証的研究はほとんどなされず、1950年代に入り自尊感情の測定尺度が作成され、ローゼンバーグ (Rosenberg, M., 1922-92) が1965年に、現在でも広く使用されている代表的な測定尺度を示して以降 (Rosenberg, 1965)、本格的に始

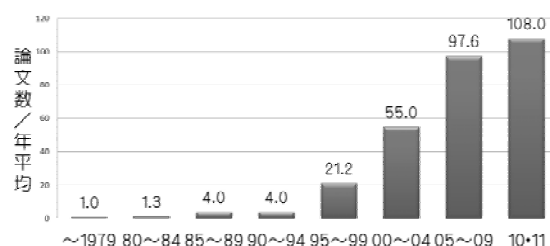


図1. 日本における「自尊感情」をタイトルに含む論文数 (NII 論文情報ナビゲータより作成)

まったとされている（榎本 他，2001：1）。

では、そもそも自尊感情とは何を指すのであろうか。これを「自己への肯定的評価」と定義する場合もあれば、否定的評価も含めたものとする場合もあり、また、自尊感情を「高低」の指標のみで測る場合もあれば、安定性も含めた場合など、多様な定義が併存している状況にある。佐藤淑子は、こうした状況の背景について、「その個々の定義は、それぞれの研究の問題意識と密接につながっており、現時点では研究者や心理療法にかかわる人々の間でも共有される定義はないといえるだろう。それはそもそも心理学者の間で「自己」についての統一的理解がないことにも根ざしている」と分析している（佐藤，2009：5）。もちろん、自尊感情の概念について検討すること、すなわち「自尊感情とは何か（What）」を問うことが重要であることはいうまでもない。

しかし、自尊感情研究においては、「自尊感情を高める／はぐくむ」ことがいかなる意義をもつのか、「自尊感情を高める／はぐくむ」ことがなぜ（Why）重要であるのかについては、自明の前提とされており、ほとんど検討がなされていない。この点について社会心理学者バウマイスター（Baumeister, R. F., 1953-）は、「自己評価の低さが暴力を引き起こす」という見方が、アメリカのカウンセラー、ソーシャルワーカー、教師たちにとって“周知の事実”として浸透していたが、その実証的根拠は極めて希薄であったことを指摘している（Baumeister, 2001：30）。¹

そこで本稿では、自尊感情の意味とそれをはぐくむことの意義について、これまでの議論を整理・確認する（Ⅰ）。その上で、ジェームズの「自尊感情」の定義の確認（Ⅱ）、および、その思想的、歴史的背景について整理し（Ⅲ）、最後に、学校教育において「自尊感情」をはぐくむことの意義について検討する（Ⅳ）。

Ⅰ 「自尊感情を高める／はぐくむ」ことのこれまでの意義付け

「自尊感情を高める／はぐくむ」ことの必要性については、国際比較調査において日本の子どもの自尊感情が他の国と比較して極めて低いことなどがその理由としてあげられることがある（図2参照）。

こうした調査結果に対しては、「自分を認めたいという思いを抱くという点では文化、民族にかかわらず共通であるが、…中略…教育方針や民族的価値観などが文化によって異なるため、その思いを抑圧する傾向が日本人にはある」のではないかといった分析がある（古荘，2009：44）。しかし、それは、「日本人の自尊心が低いとか自尊心が重視されない」わけではなく、「本人も自覚できない潜在的な態度を調べるIAT（Implicit Association Test：潜在的連合テスト）」などでは、必ずしも日本人の自尊感情が低いわけではないといった調査結果から、「自分で自分を認めたいと思っても、他人に悟られる場面では自尊感情を高めることができないのが日本人の傾向である」と指摘されている（古荘，2009：42ff.）。

他方、日本では「自己を他者より低く、または否定的に評価する傾向が見いだされる」とした上で、その背景について、「総じて日本人が自分の否定的側面を自発的に見だし、それを修正することによって、グループの一員であろうとすると同時に自己の向上もめざすという心理的特性をもつ可能性」があり、そうした日本人の自己批判的知覚から、「自己向上としての

文部科学省:高校生を取りまく状況について
日本青少年研究所「高校生の心と体の健康に関する調査報告書」
(平成22年実施、平成23年発表)

■全くそうだ ■まあそうだ ■あまりそうではない ■全然そうではない

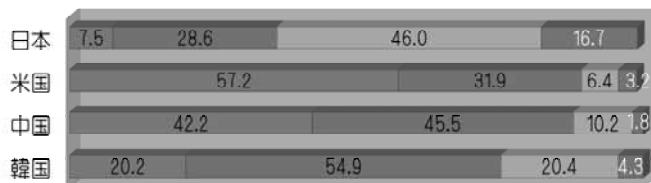


図2. 私は価値のある人間だと思う

自己批判」という心理的機制の存在を示唆する研究もある（唐澤，2001：195，201）。

以上のような心理学による自尊感情研究の成果をふまえるならば、国際的にみて日本人の（子どもの）自尊感情が低いことと、自尊感情を高めたりはぐくんだりすることとを、単純な因果関係で結んで論じることは、些か性急な結論であるといわなければならないだろう。では、「自尊感情研究」において、自尊感情をはぐくむことの意義はどのように示されているのだろうか。

『心理学辞典』では、「自尊感情は、その人自身につねに意識されているわけではないが、その人の言動や意識態度を基本的に方向づける。自分自身の存在や生を基本的に方向付ける自分自身の存在や生を基本的に価値あるものとして評価し信頼することによって、人は積極的に意欲的に経験を積み重ね、満足感をもち、自己に対しても他者に対しても受容的でありうる。このような意味において、自尊感情は精神的健康や適応の基盤をなす」とされている（中島，1999：343f.）。

中間玲子は「全般的に、自尊感情の低い人は高い人と比べて、日々のできごとをより否定的に評価し、自分の気分により大きな衝撃を与えるものとみなす傾向がある。そして、成功・失敗など、自己評価に直結するような経験のとりえ方も自尊感情のあり方で異なる。自尊感情の高い者は自分をより肯定するものとして成功体験を強く認識し、自尊感情の低い者は自分をより否定するものとして失敗経験を強く認識する。何らかの危機的状況における反応も、自尊感情による違いがある。自尊感情の高さは個人がストレスサーに対処していく一助となりうること、逆にライフストレスが与えられたときにその受け手の自尊感情の低さが希望の喪失感を生む媒介項となることが知られている。／このように、自尊感情の高さは、日常の経験で出会うさまざまな出来事を肯定的なものとしてとらえるメカニズムを支えている。そしてそのような経験の蓄積が、さらなる自尊感情の支えになるという循環的關係が、そこにはある」としている（中間，2007：12f.）。

こうしてみると、自尊感情は自己評価の基底

をなすものであり、かつ、自尊感情が高いと自己に対する肯定的評価を促進すると概括することができよう。しかし、一方で「自分の存在を自らが意味あるもの価値あるものとして認めることを、心理学用語で「自己肯定感」「セルフ・エスティーム」「自尊感情」などという」とした上で、「しかし、意味は何となくわかりそうだがずばりそれが何なのかを語ることは極めて難しい。そもそもその正体は多くの謎に包まれているとって過言でない」との指摘もある（遠藤，2010：11）。² 確かに、「Self-esteem」に対する訳語として「自尊感情」のみならず、「自尊心」（中島，2001：588）が用いられる場合もあるし、また、バンデュラ（Bandura, A., 1925-）が社会的学習理論の中で提唱した「自己効力感（Self-efficacy）」の概念——「ある結果を生み出すために必要な行動がどれほどできるかという個人の確信」（速見，2010：1f.）——とも、自己の評価に関するものか（自尊感情）、ある特定の結果に対する個人の確信か（自己効力感）といった違いは存在するものの、一般的には、厳密な異同を意識せずに用いられることが多い。³ このように、「自尊感情」、「自己肯定感」、「自己効力感」、「自己有用感」などの用語は、厳密には異なった概念ではあるが、重なり合う部分ももち、一般的な文脈では、厳密な使い分けがなされているわけではない。⁴

『生徒指導提要』では、「自己肯定感」について「社会の形成者としての資質」と学校教育との関連でその意義が示されている。この中で、涵養が求められている「社会の形成者にふさわしい資質や能力」の具体例として、「学びの基礎となる豊かな心と健やかな体を培うこと」、「知識や技術を学び、それを社会的な場面で実践し行動する力」、「自己と社会を学ぶこと」の三つをあげた上で、「こうした学びを通じて、自己肯定感や社会的な有用感、学習意欲など、学びに向き合う力が培われ、確かな学力へと結び付いて」いくとしている（文部科学省，2010：224f.）。

平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」では、「人は、他者や社会とのかかわりの中で…中略…様々な役割を担いながら生きて

いる」が、こうした「自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていく」とする。その上で、「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところ」であって、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育が「キャリア教育」である」としている（中教審，2011：17）。

こうした定義をふまえるならば、『生徒指導提要』に示される「社会の形成者としての資質」は、「キャリア教育」との関わりをふまえながら形成される必要があるだろうし、自尊感情をはぐくんだり、自己肯定感を高める目的も、社会との関わりに定位しながら論じていく必要があるだろう。

こうした視点は、心理学における「自尊感情」研究の嚆矢をなしたジェームズの研究に見いだすことができる。そこで以下では、ジェームズの研究をふまえつつ、「自尊感情」をはぐくむことの意義を再検討してみたい。

II ジェームズにおける「自尊感情」の位置づけ

先にもあげたように、「自尊感情」研究の直接的な端緒は、1890年に出版された "*The Principles of Psychology*" の中でジェームズが言及している箇所であるとされる。⁵ この書は教科書として編集されたものの、全28章、1393頁からなる大部であったために、出版の2年後、1892年にその内容の短縮版 "*Psychology, Briefer course*"（以下、"*Psychology*" と略記）が上梓されている。「自尊感情」は、いずれの著作においても、「自我」を主題とするの章——"*The Principles of Psychology*" では第10章「自我の意識（*The Consciousness of Self*）」、"*Psychology*" では、第12章「自我（*The Self*）」——でとりあげられているが、"*Psychology*" では「主我（*I*）と客我（*Me*）」の定義が加えられている。「自尊感情」を論じるにあたっては、「主我と客我」の定義が重要であるため、本稿

では1892年に出版された "*Psychology*" を中心に「自尊感情」のあり方を確認していきたい。

ジェームズは「自我（*The Self*）」と題する章の中で「自尊感情」を論じているが、その前提となっている自我の構成要素から確認していきたい。ジェームズは「私の全自我（*the total self of me*）」は、「知る者」、「主体」と、「知られる者」、「客体」の二重になっており、前者を「主我（*I*）」、「経験的自我（*empirical ego*）」、後者を「客我（*Me*）」、「純粹自我（*pure ego*）」と呼んでいる（James, 1892：176）。

この内、「客我」の構成要素を三つ、すなわち、①「身体（*body*）」を核心とし、「衣服（*clothes*）」を含む「物質的客我（*The material me*）」、②「仲間から受ける認識」としての「社会的客我（*The social me*）」、③「私の意識状態、心的能力、諸傾向（*dispositions*）」を具体的に集めた全体」としての「精神的客我（*The spiritual me*）」に分類する（James, 1892：176–181）。

その次にくるものとして「構成要素がひきおこす感情と情動（*feelings and emotions*）」としての「自己評価（*self-appreciation*）」をあげる（James, 1892：177）。この自己評価には「自己に対する満足と不満足の種類があり、「自尊感情（*self-esteem*）」は「自己に対する満足」の同義語の例としてあげられている。ここでジェームズは、これら二種類の「情感（*affection*）」を、「心に浮かんだ快の総計が自己に対する満足」を、「苦の総計が羞恥の感情」をひきおこす「二次的現象」と考える連合主義者に対し（James, 1892：182f.）、「自己満足と自己卑下の情動そのものは独自のもの」であって、怒りや苦痛と同様、「一時的情動として分類するに値するようなもの」であるとする（James, 1892：183）。

さらに、「構成要素が促す動作」として「自己追求と自己保存（*Self-Seeking and Self-Preservation*）」をあげる。ジェームズは、人間に三つの衝動——「身体的自己追求（*bodily self-seeking*）」の衝動、「社会的（*social*）自己追求」の衝動、「精神的（*spiritual*）自己追求」の衝動——を認めた上で（James, 1892：184）、それらの衝動が相互に、あるいはそれ自

身の中で対立や衝突する場合があります、その際の解決法の一つが、「選択 (choice)」であるとす。そうした選択に際し、「私たちの自己感情 (self-feeling) は、何であろうとし、また、何をすることについて自らを賭けるかに全く依存」しているのであって、そこでは私たちの現実性 (actualities) と自分が支持する可能性 (potentials) との比率によって「自尊感情」が決定されるとしている。すなわち、よく知られるところの、式1のような式である。

$$\text{自尊感情 (Self-esteem)} = \frac{\text{成功 (Success)}}{\text{要求 (Pretensions)}} \quad (1)$$

ジェームズは続けて、「こうした分数は、分母を減じても、分子を増やしても大きくすること」ができ、必ずしも成功を増やすだけではなく、「要求をあきらめること (give up)」によっても自尊感情を増やすことができるのであって、そうした意味からいえば、「自己感情は、自分の支配下にある」という (James, 1892: 187f.)。ジェームズによれば、「狭量な人 (narrow people)」は客我を収縮 (retract) させる方法によって、「思いやりのある人 (sympathic people)」は反対に、自我の内容について「拡大と包摂 (expansion and inclusion)」することによって、自己感情を調整している。その際、「思いやりのある人」は「自我の輪郭はしばしば曖昧にはなるが、その代わり自我の内容の拡大がそれを補って余りある。人のことで私に関係のないものはない」としている (James, 1892: 189)。

したがって、ジェームズにおいて「自尊感情」は、自己保存の機制として働いているものであって、それを高めていくことが直接的な目的となるのではなく、自我の内容を拡大することを目的としていると考えることができるだろう。先にもあげたように、ジェームズは「客我」の構成要素が促す動作として、自己追求と自己保存があり、この二つは相補的な関係にあるとする。我々の自我は「身体的客我を最も底辺」、「精神的客我を頂上」とし、それ以外の「身体的物質的自我」、およびさまざまな「社会的自我」をその両者の中間とする「階層的段階」であるが、

「我々の純粋な本来の自己追求は、これらの自我すべてを拡大する (aggrandize) こと」にある (James, 1892: 190)。

ジェームズは、「人々は物質的、社会的、精神的なそれぞれの自我の中で、直接的で現実的なものと、遠くにあって可能的なもの、すなわち、狭い見方と広い見方を区別し、前者を軽んじ、後者を重んずる」のであって、前者より後者を重視する具体例として、身体健康のために現在の身体的快楽を止めること、将来の百ドルのために現在の1ドルを手放すことなどをあげている (James, 1892: 191)。後者のあり方、すなわち、遠くにあって可能的なもの、広い見方をする自我を「可能的自我 (potential selves)」とした上で、その中でも「可能的社会的客我 (potential social Me)」は、「行動における明らかな矛盾」につながっていると同時に、「道徳的宗教的生活に密接に関係している」という点で、最も興味深いとする (James, 1892: 191)。

この「可能的社会的客我」は、時には非常に遠いとき、「存命中には実現が望めないとき」もあるが、それは、「理想的社会的自我 (ideal social self) …中略…による承認を得るに値する自我の追求」であり、この自我こそが「究極かつ永遠の客我」であり、「神」であるとする。その具体的例として「祈り (prayer)」をあげ、⁶「祈りを捧げる衝動 (impulse to pray)」は、「人間の経験的自我の核心は社会的な種類の自我であるにもかかわらず、その自我は唯一の適切な友 (only adequate Socius) を理想的な世界の中にすでに見出し得るという事実の必然的結果である」としている (James, 1892: 191f.)。

以上、ジェームズは「自我の内容を拡大する」ためには、「可能的自我」を育てること、その中でも「可能的社会的客我」および、それを支える「理想的社会的自我」をもつことが重要であることを示唆しているのとらえることができよう。

ではなぜ、こうした「自己追求」を規制する「自己保存」の機制が存在するのか。この点についてジェームズは、「動物学の原理」をあげ、意識が「次々と意識に現れる対象のあるものに

対して選択をするもの」でなければ、意識は「長くはその存在を維持することができない」からであるという (James, 1892: 193)。私たちは、他者に対する「同情的本能 (sympathetic instinct)」と「利己的本能 (egoistic instinct)」をもち、それらは同じ心理的水準で起こるが、往々にして極端な「同情的本能」、「非利己的興味」が起こる。それを唯一抑制するのが「自然選択 (natural selection)」であり (James, 1892: 195)、自己保存の機制もそこに位置づけられるだろう。

以下では、ジェームズがこうした視点を得るに至った背景について整理してみたい。

III ジェームズにおける「自尊感情」の淵源

ジェームズは、心理学のみならず、哲学、生理学と広範な領域に影響を与え、特に哲学の領域では、現代アメリカ思想の底流をなすプラグマティズムの創始者にして推進者であり、心理学の領域では、19世紀末からの「構成主義 (structuralism)」的心理学に対して、心を「意識の流れ」として「機能主義 (functionalism)」的に規定し、「生きた心の全体を捉えようとした」と評されている (小田, 1983: 183)。

では、なぜ「自己保存の機制」として、進化論的前提から「自尊感情」をとりあげたのかについて、"*The Principles of Psychology*" および "*Psychology*" の編集意図から確認したい。ジェームズは、"*Psychology*" の序章において「心理学を一自然科学 (a natural science)」として取り扱い (James, 1892: 1)、「生理学的心理学 (physiological psychology)」を構築することを目指していることを表明している (James, 1892: 6)。その背景には、執筆当時の19世紀後半の時代状況——「進化論の出現によって巻き起こされた精神的混乱とその後の自然科学への絶対帰依」という状況 (米本, 1984: 113) ——が指摘できよう。

ダーウィンの進化論は、心理学にも大きな影響を与えたとされる。ダーウィン (Darwin, C., 1809–1882) は1859年に『種の起源 ("*On the Origin of Species*")』を発表したが、「人間と動物との間の連続性を主張した点、動物の

〈環境への適応〉の問題を扱った点、個体差、遺伝を問題とした点、発生・発達の観点を導入した点などにおいて、心理学に大きな影響」を、具体的には、環境への適応という視点は機能心理学へ、発生の観点からは発達心理学へ、動物と人間の連続性の観点からは、動物心理学、比較心理学へと影響を与えた (大山・上村, 1998: 82)。

ジェームズの場合も、ダーウィン進化論から多大な影響を受けていることが随所にみられるが、ジェームズ自身、"*Psychology*" の序章において「心と世界とは一緒になって進化してきた」のであり、「外界の秩序と意識の秩序の間の特異な交互作用」について「進化論的に思索 (evolutionary speculations)」することによって問題が明らかになってきたとしている (James, 1892: 4)。アメリカの心理学史研究者リーヒー (Leahey, T. H.) は、「ジェームズは、完全にダーウィンの影響下にあった」とし、その代表的なものとして、「習慣 (Habit)」に対する評価、すなわち、「習慣という概念が役に立つ概念か、そうでないかを問題」にしているのは、自然選択の基準を役に立つか否かに置く、ダーウィン進化論の影響下にあることをあげる (Leahey, 1980: 375f.)。

また、ジェームズの心理学に与えた進化論の影響の最大のものとして、「自然選択」があげられている。藤波尚美は、アメリカの哲学者ウィナー (Wiener, P. P., 1905–1992) の分類を援用しつつ、自然選択説には、「ランダムあるいは自発的な変異という側面」と「それらのさまざまな変異のうちあるものを選択し、あるものを除去する環境という側面」という二側面があり、「多くのダーウィン主義者は第二の側面を強調」したが、ジェームズは第一の能動的側面を重視したとする (藤波, 2009: 94)。ダーウィンのいう自然選択は目的をもたず (長谷川・長谷川, 2000: 36)、自発的な変異ととらえることは、ある種の誤解を含んでいるが、「ランダムな変異」という視点は、「より環境に適した性質が集団中に広まっていく過程」を自然選択とするダーウィンの考え方に副ったものであるといえるだろう (長谷川・長谷川, 2000: 12)。⁷

以上、ジェームズの「自尊感情」の定義には、進化論からの影響を指摘できようが、他方では、要求を分母、成功を分子とし、分子（成功）を大きくしなくとも、分母（要求）を少なくすることでも自尊感情は増すことができるとする規定は、ルソー（Rousseau, J.-J., 1712-1778）の次のような幸福についての定義を想起させる。⁸

「もっとも幸福な人とはもっとも苦しみを味わうことの少ない人のことだ。最も不幸な人とはもっとも喜びを感じる人が少ない人のことだ。苦しみはかならず楽しみよりも多くある。…中略…この世における人間の幸福はしたがって消極的な状態にすぎない。／…いっさいの欲望は欠乏を前提とする。そして、欠乏の感情にはかならず苦しみがともなう。だから、わたしたちの欲望と能力とのあいだの不均衡のうちこそ、わたしたちの不幸がある。その能力が欲望とひとしい状態にある者は完全に幸福といえるだろう。」

その上で、ルソーは、「すべてを最善のものとしてつくる自然は、はじめ人間をこういうふうにつくったのだ。自然は直接的には自己保存に必要な欲望とそれを満たすのに十分な能力だけを人間にあたえている。…中略…この本源的な状態においてのみ、力と欲望の均衡がみいだし、人間は不幸にならないのだ」としている（Rousseau, 1762: 103ff.）。

ジェームズ自身は自尊感情を論じるにあたって、ルソーからの影響について直接言及はしていないが、ルソーが、この「幸福」の定義を述べる際に「人類は万物の秩序のうちのその地位をしめ」、「人間を人間として考え、子どもを子どもとして考えなければならない」とした上で、「それぞれの者にその地位をあたえ、…中略…人間の情念を人間の構造にしたがって秩序づけること、これが人間の幸福のためにわたしたちにできることのすべてだ」としていることをふまえるならば（Rousseau, 1762: 103）、ルソーからの影響も考慮に入れることが必要であろう。

IV 学校教育において「自尊感情」をはぐくむこと／高めることの意義再考

以上の点をふまえつつ、「自尊感情」をはぐくむこと／高めることの意義を、ジェームズの議論にそくして考えてみたい。ジェームズによれば、自尊感情は、自己保存のための機制であって、自尊感情そのものは、高めたり、はぐくんだりする対象ではなかったが（James, 1892: 189）、自己保存と相補的な関係にある自己追求においては、自我の拡大が目的となるとされていた（James, 1892: 190）。では、自我の拡大は、いかなる意義をもつのであろうか。ジェームズ自身の議論では、「自我の内容を拡大する」ためには、「可能的自我」を育てること、その中でも「可能的社会的客我」および、それを支える「理想的社会的自我」をもつことが重要であることが示唆されていたが、その意義自体は明らかではない。そこで、ジェームズが企図した方向の延長線上から、その意義を考えていきたい。

現在の「日本の若者」について、「半数以上の若者が、自分のことを「幸福だ」と感じながら、同時に「不安だ」とも思って」いることが指摘されている（古市, 2010: 100）。⁹ この結果を、ジェームズの自尊感情の規定に照らして考えるならば、大きな成功が望めない状況の中で、要求を減らすことによって自尊感情を維持しているととらえることができるだろう。ジェームズによれば、それは「客我を縮小」し、「自分が確実にもつことのできない領域との間に一線を画すこと」によって「私の客我の輪郭が、ある種の絶対性と確実性をもつ」ことによって実現される（James, 1892: 189）。こうした「客我の縮小」は、「様々な要因の結果として社会的参加を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態を指す現象概念」と定義されるような「ひきこもり」を一つの典型とみることができるだろう（厚生労働省, 2010: 6）。

また、「ひきこもり」のように社会的参加を回避しないにしても、人びとの関心や指向が、「公的な側面から自らを取り巻く日常生活や私生活、あるいはその中心に位置する「私」へと向

かって集中」していく「私事化 (privatization)」(森田, 2009: 9) も「客我の縮小」の一つといえるだろう。¹⁰ この私事化の動向は、「自由、解放、個人の幸福などの価値に正当性を与え、また、「個の尊厳にかかわる問題を社会問題化」するなど、ポジティブな側面をもちながらも、他方では、「人びとは、社会や集団への関わりを弱め、公共性の空間が形骸化」したり、「私生活へと隠遁する傾向や他者への無関心を生み出す傾向」を強めたりするなどネガティブな側面も併せもっている (森田, 2009: 10)。¹¹

「私事化」の動向の中で、共同体の側では、人びとを社会や集団へと引きつけられなくなり、個人の側では、社会や集団に意味を求めようとしなくなり、地域社会や集団の凝集性も弱まり、個と個、個と組織や集団もしくは共同体相互の間に形成される「社会的なつながり (social bonds)」の脆弱化や切断が社会のさまざまな部分に現れてくるとされる。私事化によってもたらされる「社会的なつながり」の分断状況は、「積極的な他者や集団からの排除だけでなく」、さまざまな「社会的な孤立」を引き起こしているといえるだろうが、こうした状況は「社会的排除 (social exclusion)」とよび得るであろう (森田, 2009: 10ff.)。¹²

「私事化」が特徴的にみられる領域として、宗教があげられよう。日本では、伝統的に宗教は「家」原理を中心とした共同体的性格が強かったが、1947年の民法改正にともなって「家制度」が効力を失い核家族化が進行したこと、また、農村から都市への人口流出によってムラ的人間関係が弱化したことなどによって、宗教の基盤が「共同体から個人へ」と移行したことが指摘されている (弓山, 1999: 105ff.)。そうした個人化した宗教では「個々人のスピリチュアリティ」が強調されるようになっている (島藪, 2007: 279)。

ジェームズは「自我の内容を拡大する」ためには、「理想的社会的自我」としての「神」¹³ をもつことが重要であることを示唆していたが、個人化した宗教において、「神」は「仲間から受ける認識」としての「社会的客我 (Social Me)」ではなく、「私の意識状態、心的能力、及び諸傾向を具体的に集めた全体」としての

「精神的客我 (Spiritual Me)」に位置づけられることになるだろう (James, 1892: 179, 181)。

こうした社会状況の中では、自我、特に社会的自我を収縮することによって自己を守ろうとする傾向、要求を小さくすることによって自尊感情を維持しようとする傾向が出てくるとも首肯されよう。

では、どのようにして自我の拡大をうながすことができるだろうか。自尊感情という点からいえば、自我の内容を拡大するためには、自尊感情の「分母 (=要求)」と「分子 (=成功)」をともに拡大し得るような基盤を整備していくことが必要となるといえるだろう。

社会のレベルでは、「社会的排除」に対する対抗的戦略概念としての「社会的包摂 (social inclusion)」があげられるだろう。この社会的包摂は、狭義には社会的に排除された人びとの状況を改善し問題の解決をめざそうとする考え方であり、広義には、「問題の解決を通してさまざまな立場にある市民や団体・組織を社会の意思決定過程や統治過程へと参画させ、社会そのものを新たな公共性の構築に向けて開かれた場とすることをめざそうとする考え方」である (森田, 2009: 18)。

こうした社会的包摂の視点は、学校教育においても、特に障害者理解の観点から重要視されるようになってきている。学校教育において自尊感情を高めたり、はぐくんだりすることが一義的に求められているのは、発達障害の児童生徒への対応、および、命の教育においてであったが (文部科学省, 2010: 162, 181)、前者一発達障害の児童生徒への対応については、中央教育審議会初等中等教育分科会、特別支援の在り方に関する特別委員会から「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」として、2012 (平成24) 年7月に報告が出されている。この報告の中で「共生社会」を「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会」とした上で、「障害者の権利に関する条約」第24条をふまえつつ、「インクルーシブ教育システム (inclusive education system)」を

「人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組み」としている（中教審，2012：6）。

さらに、この報告の中では、障害のある子どもと障害のない子どもが、「共に学ぶことを進めることにより、生命尊重、思いやりや協力の態度などを育む道徳教育の充実が図られるとともに、同じ社会に生きる人間として、互いに正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶなど、個人の価値を尊重する態度や自他の敬愛と協力を重んずる態度を養うことが期待できる」こと（中教審，2012：12）などが示されており、「命の教育」もここに含まれてくるといえよう。

さらに、「インクルーシブ教育」は、日本においては「特別支援教育」として展開されているが、「望ましい自立と社会参加のための教育」という意味で、キャリア教育と特別支援教育の考え方には共通するものがある」ことも指摘されている（中教審，2012：21）。平成18年の学校教育法の改正によって、「欠陥を補うために、必要な知識技能を授けることを目的」とする「特殊教育」から、「自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的」とする「特別支援教育」への転換が図られ、また、「サマランカ宣言」等での「インクルーシブ教育」が通常教育自体の改革を求めていることをあわせて考えるならば（竹内，2010：9）、「一人一人の社会的・職業的自立」を目指す、学校におけるキャリア教育（中教審，2011：17）との連携、協働も視野に入れていくべきであろう。

個人のレベルでは、「私事化」の進行の中で、「教団として制度化された宗教ではなく、個人のアイデンティティや社会の世界観の形成に寄与する役割を果たす宗教的なもの」、「個人化された宗教」への関心の高まりが指摘されている（大谷，2004：5）。こうした個人化された宗教においては、「個人の再聖化（宗教化）の傾向、すなわち、新たに個人が自ら自身の宗教性やスピリチュアリティを選びとろうとする傾向」がみられるが、具体的には「個人のスピリ

チュアリティが尊ばれる動向」と「集団的な宗教性を尊ぶ動向」として現れるとされる（島藪，2007：301）。しかし、いずれの動向も、必ずしも社会的自我の拡大を促すものばかりではない。

『生徒指導提要』では、「命の教育」に取り組む際の留意点として「自尊感情をはぐくむこと」があげられていたが、その中では、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育で、命の大切さを考えさせることが重要」とされている（文部科学省，2010：180f.）。具体的な道徳の内容に照らして考えるならば、内容項目の「3 主として自然や崇高なものとの関わりに関すること」との関連が深いといえるだろう。そこに含まれる宗教性について、どこまでふみこむべきかについては議論があるが、¹⁴ 学校教育の中で「命の教育」に取り組む際には、意識しておく必要はあるだろう。

さらに、ジェームズは人間行動への進化論的アプローチを企図していたが、その後、心理学者は「20世紀のほとんどを通じて、ダーウィンの主張に耳を傾けず、ダーウィンを無視するか誤解していた」とされる（Cartwright，2001：2）。ただし、1980年代に入り、「進化の点からヒトの心や行動の説明」を試みる進化心理学が現れ、「心、すなわち生き物の行動特性や心理的傾向もまた、環境への適応のプロセスから生じた進化の産物」としての説明が試みられている（Cartwright，2001：188，訳者あとがき）。心理学や教育学などがよって立つ「人間理論の生物学的基盤があやふやであること」については、すでに20年前から指摘され、「心理学が進化生物学の発想をとりいれることで、理解を深める方向に行く可能性もあるのではないか」とも示唆されている（河田，1992：172，177）。進化論から大きな影響を受けているジェームズの「自尊感情」概念に照らして考えるならば、進化心理学の視点から「自尊感情」を再検討することも必要となるだろう。

※

以上、ジェームズの自尊感情に定位しながら、学校教育において自尊感情をはぐくむことの意義と課題について検討してきた。課題とすべき射程は、キャリア教育、インクルーシブ教育、道徳教育と多岐にわたる。また、ジェームズの

目指したところを、進化心理学等の成果をふまえて再検証する必要があるだろう。こうした個々の課題については、他日を期して取り組みたい。

付 記

本研究は平成24年度文教協会研究助成を受けたものである。

註

- ¹ バウマイスターによれば、自己評価の高低よりも、自己評価の安定性が重要であることを示唆している (Baumeister, 2001 : 33)
- ² なお、遠藤由美は、厳密な理論や定義が存在しないことを問題にしているのではなく、一定のあいまいさを認めつつ、自己肯定感の意義について「社会ネットワークへの位置づけの適切感」の視点から考察している (遠藤, 2010 : 11ff.)。
- ³ 例えば、『生徒指導提要』では「自己肯定感・自己有用感」(p.18)、「自己有用感や自己肯定感」(p.224)、「自己肯定感や社会的有用感」(p.239)のように、「肯定感」と「有用感」とを並列的に扱う表現が見られる。
- ⁴ 田中道弘は「自己肯定感」と「自尊感情」について、「相互に関係し合っている概念である」とした上で、「欧米の社会背景から作り上げられてきたという背景をもつ、自尊感情には、自己の尊厳や、自身を尊敬 (respect) することが前提として含まれて」いるのに対し、「自己肯定感は、そうした自己の尊厳や尊敬なしに、単純に自分を好ましく、肯定的に捉えよう」としている点に異同をみとめている (榎本, 2011 : 132f.)。
- ⁵ ただし、「Self-esteem」の語自体は、17世紀半ばには用例が見られる (*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. : Oxford University Press, 1989)。
- ⁶ なお、ジェームズは『宗教的経験の諸相 ("The Varieties of Religious Experience")』において、宗教の本質的要素として「犠牲」、「告解」、「祈り」の三つをあげた上で、「祈り」こそが「宗教の魂であり本質である」として

いる (James, 1001-02=1970 : 304, 307f.)。

- ⁷ もちろん、当時の進化論が、ダーウィンの主張した生物進化論としてよりも、人間社会に生物進化論を適用したスペンサー (Spencer, H., 1820-1903) の「社会進化論」を介して理解されることが多かったこと (佐倉, 2003 : 47)、また、ジェームズ自身も、スペンサーに対しては批判的な記述が多いが、少なからず影響を受けていることをふまえるならば (藤波, 2009 : 102f.)、当時の時代状況の中では、ダーウィンの進化論を誤解する部分があったことが指摘できよう。
- ⁸ ジェームズは、「*The Will to Believe*」において、ルソーの『告白』から引用しつつ、「アヌシー (シャルメット) ですごした9年間の生活の記述は、幸福以外はなにも語られていない」と評している (James, 1896 : 33)。
- ⁹ 古市は、2010年の「国民生活に関する世論調査」のデータを用いながら論じているが、最新の調査結果をみても、大きくは変わっていない。具体的には、「現在の生活に満足しているか」という質問に対しては、20代では、2010年度が70.5%、2012年度は75.4%が満足し、一方、「日頃の生活の中で、悩みや不安を感じているか」という質問に対しては、20代では2010年度が63.1%、2012年度は62.4%が不安を感じているとなっている (内閣府HPより)。したがって、満足度は上昇し、不安は減少しているが、傾向として大きな変化はないといえるだろう。
- ¹⁰ 森田は、社会における「私事化」として、ここにあげた「人びとの意識や行動面に現れる私事化」と並んで「社会のガバナンスの局面における私事化」をあげている (森田, 2009 : 8f.)。
- ¹¹ ただし、「私事化の動向のなかで、一見確立したかに見えた「個」は、共同体内部で発生する問題事態に対して成員相互で制御する能力を低下させた結果、全体社会の制御機構からの介入に依拠せざるをえなくなる」といった、「私事化のパラドックス」も同時に指摘されている (森田, 2009 : 10)。
- ¹² 社会的排除については、問題の角度からさまざまな定義が存するが、より包括的な定義

として「それが行われることがふつうであるとか望ましいと考えられるような諸活動への参加から排除されている個人や集団、あるいは地域の状態」とする定義がある（岩田，2008：22）。

- ¹³ ジェームズは、「神」という言葉を、「きわめて広い意味に解釈して、具体的な神であるか否かにかかわらず、何であれ神のような対象を指すもの」ととらえている（James, 『宗教的経験の諸相（上）』, 1901-02=1969：56）。
- ¹⁴ 「内容項目3」の「(2) …人間の力を超えたものに対する畏敬の念…」については、「宗教的情操」との関連で議論がなされている。その背景や経緯については、（小池 他，2012）参照。

参考文献

- 荒木紀幸 編著. (2010). 『改訂 教育心理学の最前線——自尊感情の育成と学校生活の充実——』 あいり出版.
- Baumeister, R. F. (2001). 「自己愛に潜む暴力」. 『日経サイエンス』 7月号. 日経サイエンス社.
- Cartwright, J. H. (2001=2005). 『進化心理学入門』. 鈴木光太郎, 河野和明 訳, 新曜社.
- 中央教育審議会. (2011). 『今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』.
- 中央教育審議会 初等中等教育分科会. (2012年7月23日). 参照日：2012年12月10日, 参照先：「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」：
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf
- 遠藤由美 (2010). 「自己肯定感の構造——社会的ネットワークへの位置づけの適切感——」. 『児童心理』 2010年3月号, 第64巻第4号.
- 榎本博明, 稲本和子, 松田信樹, 梅垣武. (2001). 「自尊感情に関する概念的検討」. 著：『大阪大学教育学年報』 第6号. 大阪大学大学院人間科学研究科・教育学系.
- 榎本博明編著. (2011). 『自己心理学の最先端——自己の構造と機能を科学する——』. あいり出版.
- 長谷川寿一, 長谷川真理子. (2000). 『進化と人間行動』. 東京大学出版会.
- 速見敏彦. (2010). 「自己効力感（セルフ・エフィカシー）とは何か」. 『児童心理』 11月号, 第64巻第16号.
- 藤波尚美. (2009). 『ウイリアム・ジェームズと心理学』. 勁草書房.
- 古市憲寿. (2011). 『絶望の国の幸福な若者たち』. 講談社.
- 古荘純一. (2009). 『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』. 光文社新書.
- James, W. (1890). *The principles of Psychology vol.1/2*. New York: H. Holt & Co. (松浦孝作, 訳 (1940). 『心理学の根本問題』. 三笠書房.)
- James, W. (1892=1920). *Psychology: Briefer course*. New York: H. Holt & Co. (今田寛, 訳 (1992-93). 『心理学（上・下）』. 岩波文庫.)
- James, W. (1896=1912). *The will to Believe and Other Essays on Popular Philosophy*. LONGMANS, GREEN, AND CO.
- James, W. (1901-02=1970). 『宗教的経験の諸相（上・下）』. (梶田啓三郎, 訳) 岩波文庫.
- 唐澤真弓. (2001). 「日本人における自他の認識——自己批判バイアスと他者高揚バイアス——」. 『心理学研究』 第72巻第3号. 金子書房.
- 河田雅圭. (1992). 「心理学・教育学の生物学的基盤は大丈夫か？—社会生物学からの問題提起」. 『現代思想』 第20巻第5号. 青土社.
- 小池孝範, 清多英羽, 奥井現理, 紺野祐, 走井洋一. (2012). 「学校教育における宗教教育の可能性と限界について——「宗教的情操」を中心として——」. 『秋田県立大学総合科学研究彙報』 第13号.
- 近藤卓. (2010). 『自尊感情と共有体験の心理学——理論・測定・実践——』. 金子書房.
- 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業. (2010年5月19日). 参照日：2012年

- 12月10日, 参照先:「ひきこもりの評価・支援に関するガイドライン」:http://www.ncgmkohnodai.go.jp/pdf/jidouseishinpdf/jidouseishin/22ncgm_hikikomori.pdf
- Leahey, T. H. (1980=1986). 『心理学史——心理学的思想の主要な潮流——』.(宇津木保, 訳) 誠信書房.
- 文部科学省. (2010). 『生徒指導提要』. 文部科学省.
- 森田洋司 編. (2009). 『新たなる排除にどう立ち向かうか——ソーシャル・インクルージョンの可能性と課題』. 学文社.
- 中島義明 編. (1999). 『心理学辞典』. 有斐閣.
- 中島義明 編. (2001). 『現代心理学 [理論] 事典』. 浅倉書店.
- 中間玲子. (2007). 「自尊感情の心理学」. 『児童心理』 7月号, 第61巻第10号, 金子書房.
- 小田清治 監修. (1983). 『哲学中辞典』. 尚文社.
- 大谷栄一. (2004). 「スピリチュアリティ研究の最前線」. 伊藤雅之, 檜尾直樹, 弓山達也 編, 『スピリチュアリティの社会学——現代世界の宗教性の探究』. 世界思想社.
- 大山正, 上村保子. (1998). 『新訂 心理学史』. 放送大学教育振興会.
- Rosenberg, M. (1965=1989). *Society and the Adolescent Self-Image* (Revised Edition). Wesleyan University Press.
- Rousseau, J. -J. (1762=1962). 『エミール』(上). (今野一雄, 訳) 岩波文庫.
- Rousseau, J. -J. (1755=2001). 『人間不平等起源論』.(本田喜代治, 平岡昇, 訳) 岩波文庫.
- 佐倉統. (2003). 『進化論の挑戦』. 角川ソフィア文庫.
- 佐藤淑子. (2009). 『日本の子どもと自尊心——自己主張をどう育むか——』. 中公新書.
- 社会的排除リスク調査チーム 内閣官房社会的包摂推進室/内閣府生活統括官(経済社会システム担当). (2012年9月). 参照日: 2012年12月10日, 参照先: <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002kvtw-att/2r9852000002kw5m.pdf>
- 島蘭進. (2007). 『スピリチュアリティの興隆』. 岩波書店.
- 竹内まり子. (2010). 「特別支援教育をめぐる近年の動向—「障害者の権利に関する条約」の締結に向けて—」. 『調査と情報』(第684号). 東京都教育委員会. (2009年7月). 「子供の自尊感情や自己肯定感を高める教育」の研究について. 参照日: 2012年11月22日, 参照先: 東京都 HP: <http://www.metro.tokyo.jp/INET/OSHIRASE/2009/07/20j79400.htm>
- 上山春平 編訳. (1968). 『世界の名著48 パース ジェイムズ デューイ』. 中央公論社.
- 梅本堯夫, 大山正 編著. (1994). 『心理学史への招待——現代心理学の背景——』. サイエンス社.
- 魚津郁夫. (2001). 『現代アメリカ思想——プラグマティズムの展開——』. 放送大学教育振興会.
- 米本昌平. (1984). 「社会ダーウィニズム」. 著: 渡辺正雄 編著, 『ダーウィンと進化論』. 共立出版.
- 弓山達也. (1999). 「現代日本の宗教」. 井上順孝 編, 『現代日本の宗教社会学』. 世界思想社.